

学生思考形体の一考察(二)

鈴木 鳴海

はじめに

この研究は△△△短期大学幼児教育科一年の前期の「児童福祉」の試験問題の答案から抽出したものについて試みに思考形体の一資料としてまとめたものである。

従って思考全体の傾向とは言い難いが一つの傾向とみてもよいと思う。このうち「学生の恋愛について」は、既に「幼児教育研究」第6に発表したもので、ここでは「文化伝達」および「人間の内的欲求」の問題について論ずることとする。ただし、恋愛問題についても関連ある内容については併せて考察を試みようとした。

児童福祉試験問題とその分析

試験問題は三題で、これを一時間で答案としてまとめたものである。問題は次のようなものであった。

1. 家族は幼児に文化を伝達する機能を有するという。いかなる文化を伝達するかを説明せよ。
2. 幼児教育者として、恋愛の体験は必要であるか否かをのべよ。
3. 人間の内的欲求を大別すると

- 安定を求める欲求
- 情緒的反応を求める欲求
- 認知されたい欲求
- 未経験のものを経験したい欲求

の四つといわれる。あなたは幼児教育を行なう際にどの欲求充足に重点をおきますか、理由をつけて書いて下さい。

以上三題の回答所要時間は一時間、学生数は44名、年齢は18才。

児童福祉は必須科目で2単位、授業回数は15回のところ12回で終わっている。

さて第一問から答案の分析をすると

- (i) 教科書、他律的と思われる文化内容を記したもの……32名 (72.72%)
- (ii) 漠然としていたもの……11名 (25%)
- (iii) 独自の見解をしめたもの……1名 (2.27%)

(i)において文化内容を

| | |
|------------|-----|
| 言　　語…………… | 8 名 |
| 道　　徳…………… | 9 名 |
| 思　　想…………… | 2 名 |
| 生　　活…………… | 4 名 |
| 家　　風…………… | 1 |
| 習　　慣…………… | 8 |
| 社会組織…………… | 2 |
| 伝　　統…………… | 4 |
| 宗　　教…………… | 3 |
| 流　　行…………… | 1 |
| 生命の尊さ…………… | 1 |
| 経　　験…………… | 3 |

この数字は一人で2項目乃至3項目あげたものをそれぞれ一人に算入したため実員数とは異なる。

この数字でみると文化概念を道徳・言語に集約しているものが最も多く、それと同列に位するものに習慣がおかれているが、これを第一群とした。第二群は生活と伝統、第三群は宗教と経験となっている。その他は散在状態である。

(イ)の項について

文化に対する考え方が言語に比較的集中したのは一般的であるが、道徳も同列においた点については、旧来の思考がそのまま承けつがれたのか、教科書には出ていなかったが他の書物等を読んだのか、その何れであるかは判明しがたいが、もし前者とすれば伝統がこれに併記されなければならないが、学生は習慣と併記しているのが多かった。この組み立てについては誤りがないが、道徳については後記の学生の成長期を取り囲む社会環境においての解明の試みにおいてのべることにする。

(ロ)の項について

文化概念が漠然として掴めなかったもののなかで、社会の激しい変動の中で特定の文化はないから家族は伝達するものがないとした一人が含まれている。恐らくこの一人は勉強をしてこなかったに違いない。それだけに主体性がはっきりしているように思うが、この主体性はひとりよがりの独断であり、大学が学ぶ場であると規定すれば、学ばない学生であろう。学ばずして卒業するとしたならば、大学の本質は何だろうかと考えさせられる。たとえ1人であっても問題である。

たしかに社会変動は文化内容を変えてはゆくが、文化の遅滞法則は依然として通用している現在やはり独断を是正する教師の義務がある。

(ハ)の項について

この項の該当者は一人であるが、家の貧富によって文化内容が変わるから一がいには言えないというのであるが、家族と社会の関係について家族は個人と社会の媒介機能をもっている

ることを証明しておいた筈であるのに、敢えて主体的に以上のように主張したとすれば、これはパーソナリティの問題であるが、青年の反抗期の現象かは、さらに研究を深めなければならない。

次に文化を

- (1) 人間のすべての社会的行為そのものとし、その成果であるとする考え方
- (2) 社会的行為の成果の方だけに限定する考え方
- (3) 精神的な社会的行為に限定する考え方

以上の三つに大別すると、(1)の考え方は社会的行為の形象をも含めているし、(2)の考え方は過程そのものを社会として形象だけを文化とみなしている。(3)の立場は物質現実的なものを除いた精神的なものを文化と考える。

この中にはさらに哲学・宗教・芸術などを文化とみなし、科学や技術などの文明と区別するもの（A・ウェーバー・マツキーバー）もいる。

このことを念頭において、われわれは文化をおおまかに物質的文化、精神的文化、制度的文化に分けて、学生の思考の傾向をみることにする。答案に現われたものを三つの文化系統に分類すると、

- (i) 精神文化に属するもの……………23 (50.00%)

道徳(9) 思想(2) 宗教(3) 生命の尊さ(1) 言語(8)

- (ii) 物質文化に属するもの……………4 (8.699%)

流行(1) 経験(3)

- (iii) 制度的文化に属するもの……………19 (41.30%)

人間の生き方(4) 家風(1) 習慣(8) 伝統(4) 社会組織(2) となる。

文化内容を回答した 73 %の学生のうち精神文化をあげたものは全項目に対して 50 %、物質文化は 9 %、制度的文化は 41 %となっている。この数字から推察すると家族は子供に精神文化を伝達するとしたものが 91 %を占めている。

家族内において幼児に文化が伝達されることは、幼児（個人）の社会文化を意味する。幼児の行為の規範は制度的文化の伝達によって行なわれ、社会の統制の作用は法・道徳・習慣などの社会規範である限り、学生の回答は正しいものと断じ得る。

文化伝達者について

文化の伝達は子供が一人前になって社会体系に貢献していくようになるため、家族内の誰がこの要請に応ずるかを書いた学生は21名あった。

文化伝達者を

両親としたもの……………13名

家族成員（年長者）としたもの……………8名

計 21名 (47.73%)

人間は感じ、考え、行動する動物であり、この過程を与え手、受け手の心理過程について、授業中話しをし、またパーソナリティの形成についてもよく説明しておいたが、与えられた

課題について、思考は局部的にしか機能しないものが 52.3 %もあることを示していた。

第三問 人間の内部的欲求を大別すると

- 安定を求める欲求
- 情緒的反応を求める欲求
- 認知されたい欲求
- 未経験のものを経験したい欲求

以上四つといわれる。あなたは幼児教育を行なう際、どの欲求充足に重点をおきますか理由をつけて書いて下さい。

この問題に対する回答を分類すると次の表のようになった。

I 表

| | A | B | C | D |
|----|-------------------|----------------------|-------------------|-------------------------|
| | 安定を求める欲求と したもの | 情緒的反応を求める 欲求としたもの | 認知されたい欲求 としたもの | 未経験のものを経験し たい欲求としたもの |
| 実数 | 14 | 12 | 4 | 14 |
| % | (31.82%) | (27.27%) | (9.09%) | (31.82%) |

この表を分析すると、調査者としては恋愛経験を必要とするものが 77 %もあったので、情緒反応を求める欲求が全体の上位を占めると予想していたが結果は三位となり、安定を求める欲求と未経験のものを経験したい欲求に重点をおこうとするものが首位を分ち合っている。然し、学生にとって、幼児の安定は物的生活とするよりも、生活能力のない幼児の安定を精神状態の安定に求める思考は妥当であろう。従って情緒不安定の状態を排除しようと意図すれば、情緒的安定を求める欲求に重点を置いたものと同一系列にあると見做し得ると思う。このように推量すればこの二つを合せた 59 %のものがそれに該当する。

次の未経験のものを経験したいという欲求に重点をおいた 32 %のものは、幼児はいろいろなものを知りたがるからこれに重点をおく必要のあることを主張している。そして、幼児の創造性をより伸ばすことが教育の本質だと言っている。この思考形体は教育は、個性の開発であり、伸長であるという原理がその根底にあり、入学してからの影響であると思われる。認知されたいという欲求に重点を置いたものは僅かに 9 %にすぎない。他から認められたいという優越本能に重点を置く危険性を大部分のものが回避している点は、正常の思考状態にあると言いうると思う。この項に重点をおくとしたものがその理由を明らかにせず、漠然とその存在は認めてやるべきだとして、劣等感の幼児に及ぼす影響に触れていなかったことは、入学後僅か 4 カ月の間では、そこまで思考範囲が拡大しにくかったのかも知れない。

最後に、未経験のものを経験したい欲求に重点を置く理由として、他の欲求は家庭の中で十分に充たされているから、未経験の項をえらんだと書いたものがあり、安定を求める欲求を選んだものにも同じ理由を説明したものがあつた。学問の体系ではしばしば便宜的に系列的分類方法をとるが、これはあくまで便宜的であって、心理学等においては、人間のもつ複

雑性を明らかにするための分類の仕方であることの説明を怠ると、科学的教育をうけるものは、ともすると以上のような思考の仕方に傾くことに留意すべきである。

次の分析は第二問と第三問との間にどのような思考形体の関連があるかの調査である。まず恋愛経験が必要であるもの、必要でないものをそれぞれ第三問においてどのような形体を示しているかを次の表で示すと、

Ⅱ表

恋愛を必要としたもの (34名)

| (a) | A | B | C | D |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 実数 | 11 | 8 | 4 | 11 |
| % | 32.35% | 23.52% | 14.71% | 32.35% |

恋愛を必要でないとしたもの (10名)

| (b) | A | B | C | D |
|-----|-----|-----|---|-----|
| 実数 | 4 | 2 | 0 | 4 |
| % | 40% | 20% | 0 | 40% |

Ⅱ表(a)において、安定を求める欲求(A)をⅠ表と同様に情緒的反応を求める欲求(B)と同一系列にあるものと見做すと 55 %強のものがこの系列に入ることになる。然し全体として 59 %がこの系列にあったものが、恋愛という情緒的経験を必要としたもののみにしぼると却って 4 %減を示し、認知されたい欲求(C)に横すべりしたものがⅠ表より 3 %、未経験のものを経験(D)したい欲求充足に 1 %増を示している。

一般的に考えられることは(a)表においては、Ⅰ表のA、Bの合計より増し、(b)表において減少が示されることである。ところが(a)表のAは僅かに増えているがBにおいて大きく減っている。これを逆に(b)表ではA項が全体より大きく増え、B項では 7 %も減っている。

まず、Ⅱ表(a)について考えられることは、恋愛の経験は必要だとするもの、恋愛経験が対等の立場において愛し合うことであり、母性愛的な愛ではなく、人格を愛する経験を必要条件とするものが 39 %あり、子供は愛の結晶だから愛の経験所有者による教育はプラスとするものが 15 %というように、恋愛に対する思考が分れていたため、第三問に移行するに及んで分裂してしまったのではないかと思われる。

これに反して(b)表においてA項が全体、(Ⅱ表)および(a)表を凌駕し 40 %を示している安定を求める欲求の中味が、家庭生活の安定、家庭経済の安定と人権尊重に重点が置かれていた。然し問は「幼児教育を行なう際四つの中でどの欲求充足に重点をおきますか」というのである。問いの捕え方が、幼児教育を行なう際、その欲求を幼児から離れた別のところに設定し、家庭生活または家庭経済の安定にポイントをしぼる思考の仕方も「児童福祉」という立場からは肯けるが、一般的には幼児の安定を求める欲求にしぼられるべきである。

然し、D項は安定を求める欲求A項と同率の 40 %であり、(a)よりもパーセントでは上廻

っている。D項の未経験のものを経験したい欲求についての説明は(a)と大体同じであった。ただここで眼についたことは、幼稚園において知的なものを教えていく。たとえば数の概念を教える。文字を教えることは、幼児にとっては未経験のものを経験することになるとしたものがあつた。これは幼児の欲求とは言い得ないが、たしかに未経験のものを経験することには相違ない。

概して(b)表に属する学生は、問題を主観的に捕え、自己本位（自己流）の論理に組み立てている。論理の組み立ては一応筋は通っている。

最後に(b)表に零であつたC項の「認知」されたい欲求については、これを全然無視はしていない。全体のⅡ表のところでも示したように、この欲求は家庭の中で十分に充たされるとしてあつた。

(b)表を総括的にみるとA項においては幼児の欲求から離れ、D項においては、これも幼児の欲求を忘れ、未経験のものを経験させることに思考が傾斜し、これがそれぞれ 40 %合せて 80 %が問題の把握を誤つたものと思われる。

反 省 点

設問の1について、「文化の伝達」については、教室でよく話したつもりであつたが、家族の機能の説明の中で、家族構成員の地位、役割については、十分な説明をしなかつた。二単位（30時間）の限定された時間があり、しかもその所与の時間がフルに使われないうで、大学の行事等で6時間乃至8時間は失われるために、ともすると大切なところが通り一辺の説明に終つてしまう。

また学生側をみると、大切な箇所を板書しなければノートしないのが、最近の習慣のようになっている。それに加えて、「大学とは何ぞ」という問題にとり組むものが多く、カリキュラムについて、疑念をもち、学業に熱意を失いつつある傾向は見逃しがたい事実である。こういった心理状態の中でペーパーテストに対する学生の考え方と教師の考え方に相当の開きのあることも、これまた事実であると思う。

以上学科の単位制と大学の在り方を充分分析した上で、教育の在り方を検討しなければならないと思う。

第二問の「恋愛」の件については、教科書にはちょっと書いてあつたが、よく考えてみると、この設問は少し無理であつたように思う。

そもそも恋愛観については、定説はない。プラトニックなものから序情主義までは何とかまとまりがつくと思うが、青春期のハシカであり、水泡の如く明滅するロマンの世界であるとも言ふのがある。まして、彼女等はそういう経験がないというのがほとんどあり、彼女等の思春期における悩みは余りないようである。教師の青春時代は、男女分離の場において教育が行なわれ、恋情は墮落の第一歩として、思春の情緒はきびしく抑圧されていた。それだけに恋愛というものは遠いところにあるものであり、美しい世界として憧れもまた大きかつ

たと思う。従って、美しいものへの憧れと、美しい世界の経験は人間を浄め、人を美しく望める体験となると考える人が多かった。設問のねらいはここにあったのだが時代は変っていた。男女同学、道德の徳目の価値観の変化の中で育った若者には、恋愛というものを切実に思考する問題ではないかもしれない。いまの若者（女子学生）の関心は何だろうか。これを明確につかめないと今日の問題がある。

ま と め

設問三つの中、偶然とは思いますがⅠ表とⅡ表の(a)、(b)において、A項とC項が何れも同率であることである。しかもそれぞれ最上位を占めている。Ⅰ表では32%、Ⅱ表(a)でも32%、(b)で40%である。同率は偶然にしても上位をそれぞれ占めている点は、幼児教育者として幼児の安定を求める欲求に（思想的には一部飛躍したものがあつたが）応じようとする意図が一般的傾向として把握できる。また未経験のものを経験したい欲求充足を伸ばしたいとするものも前者と同率を占めている。理由には技術革命時代であり、人知の無限を誇示する万国博覧会等が潜在意識としてもたれていたかもしれない。

かくみる時、このクラスの幼児教育観は設問の範囲においては、安定を求める欲求に応じようとするものと、未経験のものを経験したい欲求に従うとするものと完全に二つに分れているとみることができる。

安定を求めるものを仮りに情緒派、主情派とすれば、未経験のものを経験させたいとするものは理性派又は主知派とすることができると思う。

同じ教室で同一の教師によって教えられながら、その思考が完全に二つの主流に分れることは、悲しむべき事態でなく、むしろよろこぶべきことであろう。今日一般大衆は無思考的習慣に陥っているといわれている中で、大学においては、学生は相当主体性を発揮する力をもっていることの証査が、このテストで示されたとみえることは思いすごしであろうか。

この主体性を誤ることなく指導してゆくことが、大学の一つの使命である。

(本 学 教 授)